

# 平安中期にいたる男女の汎称について

上野 辰義

一 はじめに

二 ヲとメ、そしてヲトコとランナ

三 ヲノコとメノコ

四 ヲノコとメノコの性格

五 まとめ

本誌第二号の拙稿「ヲトコとランナへの道——上代から中古へ——」で、ヲトコとヲミナ（ランナ）が、それぞれ別の対語関係の中から、両語による対語関係を形成していく過程を考察したが、本稿はそれに続いて、ヲトコとランナを含めた、平安中期にいたる男性女性を一般的に指す諸語、すなわち、ヲ・メ、ヲノコ・メノコ等の消長を文献的に検討し、平安仮名文学の理解に資することをめざした。

## 一、はじめに

男性・女性を性差に基づいて年齢にかわりなく汎く一般的に指す語を、「男女の汎称」(単に「汎称」といった場合も本稿ではこの意味で用いる)と呼ぶならば、現代語ではオトコ・オンナがそれにあたりますが、この二語は周知のごとく、本来それぞれの汎称でもなく、また対語関係にもなかった。<sup>①</sup>すなわちオトコ・オンナの古い形であるヲトコ・ヲミナ(トは乙類、コ・ミはともに甲類の仮名)において、ヲトコはヲトメ(トは乙類、メは甲類)と対語で、それぞれ「『若々しい活力にあふれた男性、あるいは女性』ということで、もと、結婚適齢期の男女を意味する語であったよう」(阪倉篤義『日本語の語源』)であり、これに対し、ヲミナの方は、ヲグナ(ヲキナ)とともに、年長者であるオミナ・オキナ(ミ・キは甲類)に対し、年齢的に連接する相対的な年少者、すなわち女性と男性の壮青年を元来は指していたかと思われる。<sup>②③</sup>

そのような状態から、ヲトコとヲミナ(ランナ)が、次第にともに少青壮年の男女を指すようになって、中央語では平安時代初頭頃までには、対語関係を構築するようになったようだ。<sup>④</sup>しかし、この時点では、この両語は少青壮年の男女を指すようになって、いまだ男女の汎称になつて

いるとは断定できない。乳幼児あるいは老年の男女を指す例の存在が確認できないからである。これには資料的な制約もあると思われるが、同時に平安初頭以前では、他の対語が男女の汎称としての役割を果たしていたことも関係しているらしい。だが、後述のごとくそれから二百年近く後の十世紀には、この両語が男女の汎称として用いられていることが確認できるから、平安中期にいたる時期は、上代と同様、男性・女性を指す語彙体系が、汎称としてのヲトコ・ランナの成立を軸に比較的激しく流動していた時代であったと見られる。

本稿では、このような、ヲトコ(オトコ)とランナ(オンナ)が男女の汎称となつてゆく平安中期までの、汎称に関わる諸語の変遷と、相互の意義的関係の消長を跡づけ、それによつて、オトコとオンナという日本語にとつて基礎的な語彙であることばの一樣相と、ヲトコとランナという平安時代の生活や文学にとつて重要な語の、男性女性を指す諸語の中での位置を考える一助としたい。

## 二、ヲとメ、そしてヲトコとランナ

最も古く男・女の意を表したのはオキナ・オミナ・イザナキ・イザナミなどの語にみられるキ・ミ(ともに甲類)であるう、と大野晋氏はいわれるが、<sup>⑤</sup>男女の汎称として確

認される最古のものはヲとメであらう。といつても、ヲ・メの単独の語例は多くなく、よく知られる次の古事記歌謡の例も、

八千矛の神の命や 我<sup>ア</sup>が大国主 汝<sup>ナ</sup>こそは遠<sup>ト</sup>に座<sup>イ</sup>せば  
うち廻<sup>ル</sup>る 島の崎々 かき廻<sup>ル</sup>る 磯の崎おちず 若草  
の妻持たせらめ 吾<sup>ハ</sup>はもよ 賣<sup>メ</sup>にしあれば 汝<sup>ナ</sup>をきて  
遠<sup>ト</sup>はなし 汝<sup>ナ</sup>をきて 夫<sup>ツ</sup>はなし (古事記上巻)

と、青壮年の男女を指してはいるが、乳幼児や老人やを汎く指しているわけではもちろんない。しかし、上代において、万葉集の憶良の歌に、オヨシヲという語が拾え、

……手束杖 腰にたがねて か行けば 人に厭はえ  
かく行けば 人に憎まえ 意余斯遠波 かくのみなら  
したまきはる 命惜しけど せむすべもなし

(万葉集卷五)

これは、老ユからの派生形容詞オヨシがヲを修飾している形で、年老いた男を意味していると考えられ(日本古典文学大系本注、『時代別国語大辞典上代編』「およし」の項など)、これによりヲが老年の男性をも指示対象に含んでいたことがわかるし、また、メも単独例ではないが、

女婢 笠刀自女 年四  
婢 満女 年七

(『東大寺奴婢籍帳案』『東南院文書之三』)

と、幼年の女子の名にも用いられており、ここからメが汎称であったことがうかがわれる。中古に入つて確認できる語だが、メノワラハ・ヲノワラハ、ヲヒ・メヒ<sup>(6)</sup>という語の存在も、

童女 二合女<sup>(7)</sup>乃和ら波

(日本霊異記上巻第九、興福寺本訓釈)

としここのつばかりなるをのわらは、としよりはをさなくぞある。(土佐日記)

兄弟子、七日、古記云、身兄之子弟之子、案兄弟之女亦同、俗云乎備売比也 (令集解喪葬)

ヲ・メが汎称であつた証しである。(これに対し、ヲトコ・ランナヘラミナ<sup>(8)</sup>は、注1の諸文献にも説かれるごとく、上代では対語でもまた汎称でもなかった。)

しかし、このヲ・メは中古に入ると、初期の琴歌譜や日本霊異記訓釈などに見られる単独例と妻の意のメを除いて、天人の作りし田の 石田は いなゑ 石田は 於乃乎<sup>(9)</sup>作れば かわらと ゆらと鳴る(琴歌譜天人扶理) 農夫 タツクルヲ

(日本霊異記上巻第三、国会図書館本訓釈) ぬの女にあづけて養はす。(竹取物語)

仮名書きの文献が豊富になる九世紀末以降では複合語の構成要素として用いられることが一般になり、また一方ヲト

コ・ランナに汎称としての例が見られるようになるので、  
をとこ宮みやむまれたまひぬ

(西本願寺本伊勢集)

男君おとこをそうみたりける、わが心いとうれしと思ひけり。

(伝飛鳥井雅子筆本伊勢集)

さておとこみこをそうみたまつりける。

(正保版歌仙家集本伊勢集)

人のこ生みたるに、をとこ女メ、とく聞かまほし。

(枕草子・とくゆかしきもの)

ありけるをんなわらはなん、このうたをよめる、

(土佐日記)

にげなきもの。……老いたる女の腹たかくてありく。

わかきをとこ持ちたるだに見苦しきに、……老いた

るをとこの寝まどひたる。(枕草子・にげなきもの)

そのころまでにはラ・メの汎称としての用法は一般的でな

くなつたと見られる。

が、このラ・メには男女の汎称の用法に関わつて、他の

注意すべき用法がある。一つは先の古事記歌謡の例にも見

られる男女の配偶関係に関わる用法である。

吾アはもよ 賣ウにしあれば 汝ナをきて 遠はなし 汝ナを

きて 夫ツはなし (古事記上巻)

このメは一般的の成人女性を指しているが、ラは「夫」と互換性のある特定の配偶関係にある男性を指している。

妻の意のメも、上代の文献では単独例を拾いがたいが、前掲の竹取物語の例のように中古では多出するし、上代でもメコと訓むべき例が

……父母を見ればたふとし妻子見ればめぐしうつくし

(万葉集卷五)

と存在するから、ラ・メは、上代において男女の汎称である

と同時に配偶関係にある男女をも指していたと見られる。

ただ、この配偶関係のラ・メも中古に入ると、

あまの浮橋の下にて、めがみながみと成り給へる事を

いへる歌なり。(古今集仮名序)

と、複合語ではその対語性をとどめているものも見いだせ

るが、メはともかく、

妻 白虎通云妻メへ西反和名米メ者齊也。與夫齊躰也。

…… (元和本倭名類聚抄)

配偶関係を示すラは、

夫 古記云、妻妾為夫服一年、……俗云、平比止也

(令集解喪葬)

聾 骨計反雙之兒 平不止又加太支 聾聾同

(享和本新撰字鏡)

夫ツ (石山寺本法華義疏長保点)

と、ヲヒト・ヲフト(・ヲット)と変形したものが一般となり、その対称性が崩れるとともに、新たにヲトコ・ラン

ナもこの領域に介入してきて、

おとこをむなのなかをもやわらげ（真名序「和夫婦」）

（古今集仮名序）

三郎なりける子なん、「よき御をとこぞいでこむ」と

あはするに、

（伊勢物語六三）

父おとど、「女にもまたも会ひぬるものにこそあれ。

親こそ、え会はさんなれ。……」

（宇津保物語國護下）<sup>(8)</sup>

夫 白虎通云、夫猶扶也、以道扶接也、和名乎字止、

一云乎止古

（元和本和名類聚抄）

妾 文字集略云妾、接反和名乎無奈女、非正嫡、故以

接為稱。……小妻也。

（元和本和名類聚抄）

結婚形態や位相の問題もからんで、配偶関係の男女を指す用法が複雑化してくる。

こうした変化の芽は上代に既にあつたかも知れないが、資料的に顕在化するのは中古で、ともあれ、上代までにおいては、ヲ・メが、男女の汎称と配偶関係にある男女とを指していた時期があつたと見られる。この点はこれまで言及してきたように、平安中期におけるヲトコ・ランナの対語にも共通しているのだが、男女の汎称と配偶関係にある個別の男女とをそれぞれ同一語が指すということは、考えてみれば、人間として肉体的にも社会的にも中核に位置し

て人間を代表するのが青壮年の男女であり、彼らがまた、

性別と配偶の本質である生殖・繁殖活動においても、その機能の中枢にいるわけであるから、自然なことではあつた。

もう一つの注意すべき用法は、人間の男女のみでなく、

それ以外の雌雄の別にも関わるものである。

高円の秋野の上の朝霧に妻よぶ乎之可出で立つらむか

（万葉集卷二十）

鰐 五鰐反乎女久地良

（享和本新撰字鏡）

これは、ヲトコ・ランナにも共通する。

二尺ばかりなるくちなはの……、「これがをとこ女」

とて奉れり。……。尾はたらかさんをめと知れ

（枕草子、社は）<sup>(9)</sup>

憧憬 橋梁之左右之柱 乎止古柱（享和本新撰字鏡）

ただ、これらも、人間の男女に関わるヲ・メおよびヲト

コ・ランナの、人間以外の雌雄への転用・拡大と見るとき、

その転用・拡大の基盤が、「妻よぶ乎之可」とあるように、

汎称にあるのか、それとも配偶関係の用法にあるのか判断

が難しい<sup>(10)</sup>。人間の男女に関わるヲ・メ、ヲトコ・ランナが

両用法を有してそのいづれがより根源的なものであるのか

見極めがたいのと同様である<sup>(11)</sup>。

こうして、男女の汎称は、上代はヲ・メ、平安初期を資料的なグレイゾーンとして間において、少なくとも十世紀

には既にヲトコ・ランナへと移行していたと見られる。ただ、ヲ・メからヲトコ・ランナへと直ちに、あるいは単線的に移行していったかどうかは問題がある。というのは、ヲノコ・メノコという対語が同時期、同様の用法を持つて存在していたからである。

### 三、ヲノコとメノコ

ヲノコは家持の歌に例（ただし、汎称とは断定できない）が見えるから上代に存在したことは確認できる。

……鶏が鳴く あづま乎能故は 出で向ひ 顧みせず  
て 勇みたる たけきいくさと ねぎたまひ

（万葉集卷二十）

これに対しメノコは平安時代に入って訓点資料や古辞書・仮名文学に見いだされるが、日本書紀の訓注・古訓にみられることやヲノコとの対称性から、メノコも上代には存在していたと見ておいてよいと思われる。

汎称の例としてはメノコに次のようなものがある。

（吾今嚙玉生兒、必）當為女（矣） 女乃己奈良牟

（日本書紀私記乙本神代上）

ヲノコには独立例ではないが、

かたちよく、髪ながくて、髪ひとともに結ひたるをの  
こわらは（ただし前田本は「をこの——」）の、よき

ほどなる四人、（宇津保物語楼上）

があり、またともにヲノコゴ・メノコゴの語形があるので、

（蘇我入鹿ハ）呼 男ヲノコメノコ女、曰、王ミ一子

（岩崎本皇極紀平安中期末点）

それが上代であつた保証はないが、ヲノコとメノコが汎称として用いられたことは認めておいてよい。

また、ヲ・メ、ヲトコ・ランナ同様、人間以外の雌雄の別に關わる例も見られる。

陰陽未分 女乃古遠乃古和可礼奴止岐

（日本書紀私記乙本神代上）

こうした点で、ヲノコ・メノコは、ヲ・メ、ヲトコ・ランナと類似した用法をもつが、しかし、後二群が有していた配偶關係にある特定の男性・女性を指す明確な例がない一見それと見られる例をあげてみる。

「吾是男子也。理當先唱。如何婦人反先言乎。……」

（日本書紀神代上）

男子 遠乃古女万志良乎（日本書紀私記乙本神代上）

婦人 太乎也女尔之豆女乃古尔之豆

（日本書紀私記乙本神代上）

この日本書紀二神国生みの条について日本書紀私記乙本が付している訓注は、「男子」「婦人」という、「夫」「妻」などの配偶關係の男女を指す語とは異なる、一般的な成人男

女を指す語についてのもので、實際、日本書紀のこの箇所でも、二神は夫婦となる前の独立した男性女性の関係にある段階で、「男子」「婦人」の語もそれに対応する。訓注でヲノコメにタヲヤメ、マシヲラにメノコをそれぞれ対応させていると見られるのも、話主のイザナキの立場からの聞き手イザナミに対する上下意識・精神的距離に関する待遇を考慮してのものと解され、これも配偶関係のものでなく、個対個の人間関係のものである。

吐火羅人、共妻舍衛婦人來。

(北野本齊明紀)

これも「妻」の文字と近出しているが、配偶関係ではない。父ぬし聞きたまひて、のどかなりける人なりければ、「おのこもかしこき者にて、女おさなき者にあらず。さしたるやうあらむな。……」

(篁物語)

これは、父親が異母兄妹である篁と娘がただならぬ関係になったのを知って、娘を前にしてその母親に言うことばであるが、これはもちろん篁と娘の配偶関係を前面に立てて言っているわけではない。

おとゞ「何事をかはさは思けん。我らをつらしと思ふこともあらじ。つかさかうぶりの事は限りあれば」。

御いらへ、「をのこはをんなにつけてのみこそは」。

(宇津保物語蔵開上)

これは、祐純が、父正頼に弟故仲純が愛執の罪のために成

仏でぎずにいると藤壺の夢に見えたと言ったのを受けた正頼と祐純の会話である。仲純は同母妹あて宮(藤壺)に懇想し恋死にした。当人以外家族は事情をしらない。さらに仲純に妻はいなかったようだから、この例も配偶関係ではない。

ただ以下の例は、「をのこ」が一般的な男子を指している可能性も十分あるのだが、文脈中の「を」と「め」などの関係で、「夫」の意が存在しないと断言しきれないもので、もし、これらの「をのこ」に配偶関係の意味を認めるなら、こうした例は十一世紀初頭前後からみられるので、その頃にこうした用法が生じたことになる。(最後の大唐西域記中の「夫」は、後続の「丈夫」と同意とみるべきだろうが、同様。)

海女のかづきしに入るは憂きわざなり。……をのこだにせましかば、さてもありぬべきを、女はなほおぼろげの心ならじ。舟にをとこは乗りて、歌などうち謡ひて……。 (浮上した海女がハアハア息をしているのに) 落とし入れてただよひありくをのこは、目もあやにあさましかし。(枕草子、日のいとうららかなるに)

「をのこはめがらなり。いとやむごとなきあたりに参りぬべきなめり」

(栄花物語はつはな)

「をのこはめは一人のみやはもたる、痴れのさまや。」

……

(栄花物語玉のむらぎく)

(東女国は)世に女を以(て)王と為(す)。……。

夫<sup>トコ</sup>モ亦王と為レドモ、政事を知(ら)不<sup>トコ</sup>。丈夫ハ唯征  
伐ノタ<sup>ナリハヒラヌクノミ</sup>カヒシ、田種<sup>ナリハヒラヌクノミ</sup>而已<sup>ナリハヒラヌクノミ</sup>。

(大唐西域記卷四)

こうしてヲノコ・メノコに関しては、配偶関係にある特定の男性女性を指す用法を、ヲ・メ、ヲトコ・ランナの場合のように当初からの確実なものとしては認めがたいのだが、ヲノコ・メノコには他にも特徴がある。それは、ヲノコもメノコも上代からともに存在したと推定されるのだが、対語としての均衡が早くから、特に和文において崩れている、メノコの用いられることが絶対的のといつてよいほど少ない、ということである。(訓点資料における様相は十分把握できていないが、ヲノコに比べてメノコは日本書紀関係の訓に集中する印象を受ける。)いま、平安中期の幾つかの仮名文学作品におけるヲノコとメノコの用例数を示すと〔対〕の前の数字がヲノコの用例数、後の数字がメノコの用例数)、古今集(9―詞書におけるヲノコドモのみ―対0)、後撰集(2―詞書におけるヲノコドモのみ―他に詞書にヲノコゴ1―対0)、竹取物語(11―ヲノコ1・ヲノコドモ10―対0)、伊勢物語(0―異文に1―対1―メノコドモのみ―)、大和物語(1―対0)、土佐日記(1―対0)、蜻蛉日記(26―ヲノコ3・ヲノコドモ

23―対0)、宇津保物語(85―ヲノコ30・ヲノコタチ1・ヲノコドモ54―他にヲノコゴ12・ヲノコゴドモ2・ヲノコワラハ1―対7―メノコドモのみ―)、落窪物語(23―ヲノコ10・ヲノコドモ13―他にヲノコゴ5―対0)、枕草子(33―ヲノコ22・ヲノコドモ11―他にヲノコゴ5―対0)、和泉式部日記(1―ヲノコドモのみ―対0)、源氏物語(35―ヲノコ20・ヲノコドモ15―他にヲノコゴ3・ヲノコハラカラ1・ヲノコミコ1―対0)、紫式部日記(1―ヲノコのみ―他にヲノコゴ1―対0)、更級日記(14―ヲノコ12・ヲノコドモ2―対0)、栄花物語(9―ヲノコ4・ヲノコドモ5―他にヲノコギミ1・ヲノコゴ7―対0)と、ヲノコはほどの作品にもまんべんなく出現しているが、メノコは伊勢物語と宇津保物語に見えるだけである。参照した索引類の底本の状態にもよるがこの時期のヲノコ・メノコのおおよその使用頻度は察せられる。その数少ない伊勢物語と宇津保物語におけるメノコ of 全用例(いづれもメノコドモ)は以下の通りである

その家のめのこともいでて、浮海松の波によせられたる拾ひて、家の内に持て来ぬ。(伊勢物語八十七段)

これは、染殿。御達十人ばかり、めのこども(前田本のナシ)二十人ばかり、大きな鼎立てて、染め草、色々に煮る。……。ふねどもにめのこどもをりたちて



そめぐさ洗へり。

(宇津保物語吹上上)

これは、打ち物の所。御達五十人ばかり、めのこども三十人ばかりあり。

(宇津保物語吹上上)

(中宮)「その仁寿殿のめのこ(前田本一めのとこ)

どもも侍るは。など、すべて、このめのこどもは、いかなるつびかつきたらむ。……」。……「……世の中に女はなきか。それにまさりたらむ人を、おのれ奉らむ。近うは、をのが一人もち奉りたる女みこ得給へ。さりととも、そのめのこどもには劣らじ」

(宇津保物語國讓下)

「(中宮。わが藤原氏の男子は)一人してだに、かしこき者は。ただ、めのこどものやうにて」と腹立ち給ひて、

(宇津保物語國讓下)

このメノコドモはいずれも女性の奉公人と、それなりに身分ある女性あるいは女性一般に対する見下した称呼である。この下目に呼ぶという性格は同様に男性の奉公人・下位や親しく打ち解けた存在として待遇される男性を指すヲノコドモとほぼ対応をなしてはいる。

家に使はるゝをのこどものもとに、「つばくらめの巢くひたらば告げよ」とのたまふを、

(竹取物語)

ゆきかふ舟ども、帆をひきあげつゝいく。浜づらにおのこども集まりゐて、「歌つかうまつりてまかれ」と

いへば、いふかひなきこゑひきいでゝうたひてゆく。

(蜻蛉日記中)

——ここには土地の漁師なども交じつていよう。

おとど、「忠雅は承りぬべし。公卿・大臣、定め申し侍りなむ。……まづかかることはしもよりなむ。いかなるべきことぞ、をのこども」とのたまへば、宰相・大納言「……」

(宇津保物語國讓下)

——一族の出である中宮を前に、太政大臣忠雅が同じく一族の公卿・大臣に呼びかけた言葉。

しかし、上記作品でヲノコドモが一四五例であるのに対してメノコドモは八例と格段に数が少ない。

また、ヲノコドモ・メノコドモでなく、ヲノコ・メノコ自体の対も崩れている。上記の諸作品を含め、平安中期の仮名文学資料において管見に入つたメノコの例は、女兒を意味している兼澄集の次の一例のみである。

伊予の守あきのぶがめのこうみたりし七日夜、美濃の守ともまさがかたらひ侍りしなかにて、昔のことを思ひいでて侍りし

(兼澄集)

「あきのぶがめのこうみたりし」の部分、「あきのぶが妻の、子生みたりし」と解釈する余地もあるが、兼澄集では名を呼び捨てにする兼澄と同ランクの階層の人物には「ともまさが」かたらひ侍りし」のごとく主格表示の助詞にノで

なくガを用いるのが一般なので、「あきのぶが」の「が」も所有格でなく主格の表示と見られる。つまり、このメノコも待遇が粗略である、十分敬意が払われていないといえ、そしてまた、女児を指すメノコは、前掲の日本書紀私記乙本神代上にも例があるとおり異例ではないのだが、仮名文においては、これが管見に入つた唯一例であるように女児を指す一般的な語ではないのである。女児を指す仮名文における一般的な語はランナ・ランナゴであり、その対語はヲトコ・ヲトコゴ・ヲノコ・ヲノコゴである。

玉光りかがやくをのこを生みつ。(宇津保物語俊蔭)

「(母後の六十賀に)子どもなども御覽ぜさせよ。」

「……」をとこは遊びし、女は物の音掻き鳴らして聞こし召させ給へかし」(宇津保物語語菊の宴)

かの子ども持たりし人は、いづちかものしにし。をとこは、はかなくて失ひつめりき。女ごさへは、いかにしなしてし。(宇津保物語語国譲上)

正月十三日、いと平かにをのこ生みたまへれば、

(落窪物語巻二)

このやしなひたる子をも、むげにわがものになして、女はされどあり、をのこはつとたちそひてうしろ見(枕草子、かしこきものは乳母のをとここそあれ)女一所、十二三ばかりにて、また次々をとこ二人なむ

おはしける。

(源氏物語楨柱)

もつともメノコにもメノコゴという形が訓点資料にみえ、それはそこでヲノコゴと対になつてゐるのだが、

(蘇我入鹿ハ)呼男<sup>ヲノコ</sup>女<sup>メノコ</sup>、曰、王<sup>ミコ</sup>子

(岩崎本皇極紀平安中期末点)

仮名文学作品ではメノコゴは管見の範囲では拾えず、ヲノコゴもランナゴと対になつてゐるものが多い。

左大臣の家のをのこ、女こ、かうふりしもき侍りけるに すらゆき(後撰集慶賀)

応和元年七月十一日に、よつなるをんなごをうしなひて、おなじ年の八月六日に、又いつつなるをのこ子をうしなひて、無常の思ひ、ことにふれておこる。

(順集)

「我死なば、かはりには、をのこにまれ、をんなごにまれ、君に仕うまつれ」と、(落窪物語巻四)

つまり、仮名文学作品では、メノコ・メノコドモ・メノコゴなど、メノコ類がヲノコ類と比較して用例数で極端に劣り、またメノコドモはともかく、メノコ・メノコゴなどの形が、ランナ・ランナゴなど、ランナ類に置換されている状況がある。そして仮名文学作品におけるメノコ類は指示対象への待遇が見下されたり粗略である(対象が自己および自己の身内である場合は卑下)のが一般であつた(日

本書紀関係の訓中の例も多くそのように解することが可能である<sup>13)</sup>。

この対象への見下しという待遇性は、メノコドモと対応するヲノコドモにも基本的に認められるものであったし、またヲノコ自身についても次のような辞書の説明に言及がみられるように一般的な認識となつてゐる。

「女(め)のこ」の対。ヲは牡(おす)の意で、平安時代以後は低いものとして扱ふ男性を指すことが多い。ヲノコも多くは軍卒・侍臣・下男などの意。男の意と見られる場合も尊敬の対象とはならない男性を指し、類義語ヲトコのような、結婚の相手としての男性の意には用いない。

(岩波古語辞典)

語源は男(を)の子。(ヲトコと比較すると)平安時代の用例からは、「をのこ」にやや見下げた語感が認められる以外に、さほどに意味上の違いは認めがたい。

(古語大辞典)

実際、ヲノコの多くの用例にそうした意味合いを認めることは困難ではないのだが、しかし、中にはそうした待遇性を認めがたいものもある。例えば次のようなものである。あはれ、をのことてよう行なひたりけるよ、と見聞くも、かなし。

(蜻蛉日記下巻)

——作者の清水参詣中自宅の隣家で火災が発生したが、留

守居の息子道綱の活躍で我が家には混乱もなかったのを感じていることば。「をのこ」であることを自覚して行動した道綱をほめても見下しはしていない。

「……。おなじくは、この宮、をのこうみ給はなん。

我こそはと思ひて、うみつらねたるものゝ、口あかずをしふせつべく」との給へば、(宇津保物語語国讓中)

——季明娘で東宮女御の宣耀殿が兄実忠に言っていることば。自分は東宮の子を宿さないで、続々と出産している藤壺をねたんで、同じことなら現在懐妊している嵯峨院と大后の娘の小宮が男子を出産してほしいといっているもの。この「をのこ」は、父母祖父母とも発話者よりも高貴で、また発話者の期待の心情からも見下しは認められない。

「……。子の道の闇を思ひやるにも、をのこはいとも親の心を乱さずやあらむ、女は限りありていふかひなき方に思ひ捨つべきにも、なをいと心くるしかるべき」などおほかたのことにつけての給へる、

(源氏物語権本)

——発話者八宮には「女」すなわち娘はいても「をのこ」すなわち息子はいない。つまり自分にはいない息子一般を「おほかた」に「子の道の闇」すなわち子を思う親の愛情からいったわけで、見下しは認められない。

「主のみとしは、をのれにはこよなくまさりたまへら

んかし。みづからがこわらはにてありしとき、ぬしは廿五六ばかりのをのこにてこそはいませしか」

#### (大鏡序)

——夏山茂樹が「大宅世継」に言っていることば。自己には「をのれ」「こわらは」と卑称を用い、年長者の世継には「主のみとし」「たまふ」「います」などの敬語を用いて待遇している。「をのこ」にも見下しは認められない。

つまり、メノコには用例が少ないという事情も関わつてか、見下しの意味合いの認めがたい例を見いだしにくいのだが、ヲノコの方は必ずしも見下しの意味合いをもつ例ばかりを見いだすわけではないのである。

こうして、ヲノコ・メノコも、ヲ・メやヲトコ・ランナと同様、かつて汎称として用いられていたという状況を認めることはできるのだが、ヲ・メやヲトコ・ランナと異なり、配偶関係にある特定の男性女性を指す用法を少なくとも当初からもつていたとは認めがたい、対語としての均衡が早くから、特に仮名文学作品において崩れている、その内実は、メノコ・メノコドモ・メノコゴなどのメノコ類がヲノコ・ヲノコドモ・ヲノコゴなどのヲノコ類と比較して用例数で極端に劣り、またメノコドモはともかく、メノコ・メノコゴなどの形が、ランナ・ランナゴなど、ランナ類に置換されている(ランナドモもメノコドモ以上に一般

的に拾える)、そして、ヲノコ類・メノコ類とも見下しの意味合いをもつ例が多いが、用例の少ないメノコはともかくとして、ヲノコは必ずしも一般的理解のように見下しのニュアンスを帯びる例ばかりではない、などの特徴を示している。

#### 四、ヲノコとメノコの性格

ヲノコとメノコの語構成については、ヲノコについての先の辞書の説明のように「ヲーノーコ」「メーノーコ」、つまりヲ・メに格助詞ノと名詞コ(子・児)がついたものの、ヲ・メからの派生語と認めてよいであろう。このコは、オヤ(親)の対語で、人間に限れば成人男女を含む子ども、さらに幼児を指し、そこから、折口信夫が、

菜つます子 子 語としては、自由でも、意義としては、幾分下目に物を言ひかける、親しみを持つた語である。つまり卑称でもあり、昵近称でもある訣だ。愛人にも、友人にも言ふが、熟語としての場合の外、貴人には言はない。  
(『萬葉集講義』)

兒 兒童を意味する處から延長せられて、おのれの擁護の下にあるものに對する心持ちで、人を見る場合に使つたらしい。だから、どうしても、同格以下の人に対して言ふことになつてゐる。男・女に係わらず言ふ。

と言うように、擁護下の下目の存在の者に対して、見下したり親しみを抱いたりして呼ぶ場合にも用いられるようになったものと考えられる。実際、ヲノコ・メノコと同じように、格助詞ノ・ガによりコがついている形でも、

みつみつし 久米の古が 頭椎い 石椎いもち 撃ち  
てし止まむ (神武記歌謡)

命の 全けむ人は 晝薦 平群の山の 熊白椿が葉を  
髻華に挿せ その古 (景行記歌謡)

大君の 心を緩み 臣の古の 八重の柴垣 入り立た  
ずあり (清寧記歌謡)

銀の 目貫きの太刀を 下げ佩きて 奈良の都を ね  
るは誰が古ぞ (神樂歌採物)

と、軍団の統轄者や老人・年長者が目下の久米部の者や若者に疎遠でなく親近感を抱いて呼びかけ、また臣下が皇子に畏まる(表現上のみだが)意味合いで用いられている。

よって、ヲノコ・メノコに見られた卑称的ニュアンスも、このようなコに由来するであらうし、また、特にヲノコに明らかであった卑称的ニュアンスの認められない例も、前章に示したものでいうなら、立派に行動しえたわが子(蜻蛉日記)・自己の恨みを晴らしてくれる男児(宇津保物語 国讓中)・愛する仮想の息子(源氏物語権本)・二十五六歳

の青年(大鏡)に対して、愛情や親しみを抱くなどの「昵近称」的ニュアンスのコの側面の現れたものと見る事ができる。(もつとも大鏡の例は年下の茂樹からの発話にみえるもので、「こわらは」ともども現在の百八十歳の老人の立場からのものなら納得がいくが、年下の自己からのものなら、ヲノコの用法が変化した段階のものということになる。)したがって、用例の少ないメノコ類はさておいて、ヲノコ類には卑称の意味合いのみならずこうした昵近称の意味合いの存在にも注意して個々の用例の解釈・理解にあたっていく必要があるだろう。

また、ヲノコ・メノコに、配偶関係にある特定の男性女性を指す用法の存在を少なくとも当初からのものとしては認めがたいということも、このコに由来する二つのニュアンスの存在から理解することができる。ヲノコ・メノコが擁護下・下目の待遇意識に基づく語であったから、妻たる女性に対してはともかく、夫たる男性に対しては呼称として固定しがたいものであったと思われるのである。さらに、ヲノコ・メノコの対語としての均衡が早くから崩れ、メノコ・メノコゴなどのメノコ類がランナ・ランナゴなどのランナ類に置換される様相を見せていたことも同様にこのコに由来すると解される。このコは、「子・児」であると同時に、ヒコ・ヲトコ・ムスコ・イラツコなどにおいて男性

を表すコに通じ、女性的意義要素を表すヒメ・ヲトメ・ムスメ・イラツメなどのメと対立していたからである。メに對立するコのもつ男性的意味合いが、コを構成要素にもつメノコ類が女性的ニュアンスを十全に發揮することを阻害し、それが筆者や読者として女性が重要な存在となる仮名文学作品での使用に歯止めをかける要因となつたろうと想像されるのである。

## 五、まとめ

こうして、ヲノコ・メノコは、ヲ・メから、擁護下の子ども・幼児、それに類する待遇を受ける年少者・下位者等の人物に對して用いる派生語として発生・普及していったと思われるが、すると汎称としての用法も、こうしたニュアンスをとまなう場で、ヲ・メに遅れて成立していったとみるのが順当であろう。これに對してヲトコ・ランナは、青壮年の男女を若い・美しいなどの価値的ニュアンスを伴いながら指していく中で、汎称としても力を得ていったものかと思われる。

しかし、この汎称としてのヲノコ・メノコとヲトコ・ランナの前後、あるいは並行関係の具体相は、明瞭でない。というのは、仮名文の資料が豊富になる九世紀末から平安中期において、ヲトコとランナはその早い時期において少

なくとも既に対語となり汎称となつていたと見られ、またヲノコ・メノコも、既にみてきたような諸特徴を仮名文学作品において示していて、その汎称としての盛期を既に終了していることをうかがわせるからである。こうした段階に至るまでの、平安初期を中心とした時期の動向を資料的に跡づけにくいのである。ただ、プラスの価値的ニュアンスを帯びたヲトコ・ランナに對して、見下し・卑下・親しみ、さらに非女性的などのニュアンスを帯びるヲノコ・メノコが、その使用される場を限定される傾きをもつていたことは容易に想像される。

ともあれ、以上のような事情のもと、ヲ・メとその末裔ヲノコ・メノコ、ヲトコ・ランナの各語は、男女の汎称に関わる語彙として平安中期の仮名文学諸作品に流れこんでいる。これらには文学的用語として注意されるべき、また實際注意されているものも多い。平安仮名文学の解釈に欠かせないこれらの諸語の個々の用例の理解と、これらの語の使用にまつわる文学的伝統も、以上のような語相互の関わりと背景を意識しながら考えてゆく必要があるだろう。

### (注)

(1) オトコ・オンナの古い形であるヲトコ・ヲミナのそれぞれの語源・原義・対語についての説に、折口信夫『翁の発生』『万葉

集研究」巻一、高崎正秀「物語文学序説」「伊勢物語の意義」、大野晋「日本語をさかのぼる」、阪倉篤義「日本語の語源」等が、

また、ヲトコ・ヲミナを含む古代語の男女に関わる語彙についての論に、家永照美「男・女」の呼称の変遷——上代文学を資料として——（『九州大谷国文』12、昭和五十八年七月）、佐藤亨「上代・中古における親族語彙——オトコ（男）・オンナ（女）

オット（夫）・ツマ（妻）を中心に——」（『日本語日本文学』（創価大学）2、平成四年三月）等がある。私も、ヲトコとヲミナ（ランナ）が新たに対語関係を構築するに至るまでの事情を、語義・用法面の推移から検討したことがある（『ヲトコとランナへの道——上代から中古へ——』（『京都語文』2、平成九年十月）。

(2) ヲミナ・ラグナを少女・少年とする見解を私は採らない。注1の拙稿参照。

(3) 少年の男女を指す例としては、ヲトコには「古有年少儻子（俗云加味乃乎止古加味乃乎止亮）」（常陸風土記香島郡）、ランナには「童女（乎無奈）」（高山寺本和名類聚抄、信濃郷小泉郡、ただし同じ郷名が『日本霊異記』下巻二十三では「嬢里」と表記されている）がある。

(4) 注2に同じ。

(5) 注1の大野晋氏著。

(6) メノワラハ・ヲノワラハは、かつてはメーノワラハ・ヲーノワラハという連語であつたろうが、中古においてヲ・メが妻の意のメを除いて単独で用いられることがなくなったようなので、これらも中古の段階では複合語化したと見ておくべきだろう。

(7) ただし、このヲは汎称でなく、後述の「夫」の意と見られる。また、平中物語三十七段に「このをとこ、ひとつをの家に、いとこどもぞよき女どもにてある」という例があるが、この「を」は

他に用例が見られず、幾つか説がでているが、「意不詳」（『日本古典文学全集本注』）と言うべきである。

(8) 妻である女一宮の出産の苦しみを見て嘆く仲忠に対して、仲忠の父兼雅が、親子は一世夫婦は二世の意味合いで言った言葉。ただ、前田本等のこの箇所を「女」と翻訳するのが一般だが「め」の仮名であれば、適例でなくなる。

(9) 校本枕草子によれば「女」の部分三巻本の陽明文庫甲本・前田本等に「をんな」とあり、「め」の部分は同じく「女」とある。

(10) （サ）ヲシカに限って言えば、「乎之可」「小牡鹿」等の表記の差と汎称・配偶関係の用法との対応は明確でない。

(11) ヲ・メおよびヲトコ・ランナには、息子・娘の意味と見られる例もあるが、意義的にどれだけ確立していたか不明なので、ここでは特には取り上げない。「御をんな、宮の御はらのおほい君は」（『宇津保物語藤原の君・を」とこ（前田本「おこと」、他に「を」とこ君」「を」とこ」等の異文あり）も女君たちもつどひて」（『宇津保物語国譲下』）。

(12) 「遠乃古女」の「女」については、不審が残るが接尾語の「め」かと現段階では考えておく。

(13) 前掲のものに加えて、次例を補足しておく。卑下の例である。愚癡婦人、臨天（の）下（に）、以頓（に）亡（せり）其縣（を）。（『岩崎本推古紀平安中期末点』）

(14) ヲノコの用法が院政期とそれ以前とで異なるという発言は既に、榊原邦彦「を」とこみこ」「を」とこぎみ」「を」とこみや」「を」とここ」（『平安文学研究』六九、昭和五十八年七月、など）にある。

(15) 例えば、福田智子氏「を」とこみこ」考」（『国語国文』平成八年六月）は、注14の榊原氏論文を踏まえて、次のように言う。平安朝の物語類では、身分差に基づいて「を」とこ」「を」のこ

―が用いられており、『榮花物語』続編や『大鏡』が成った十一世紀末葉にはその差が必ずしも明確ではなかったが、それ以前では、総じて女御以上の身分の母をもつ皇子を指して「を」とこみこ」と称し、『源氏物語』の光源氏や『榮花物語』正編の藤原元子の生む皇子のように更衣腹の皇子を「をのこみこ」と呼んで區別したらしい。光源氏はその誕生時からしてどんなに帝寵が厚くても明確に劣り腹の皇子として読者に印象づけられた、と。しかし、福田智子氏は挙げておられないが、伊勢集には本稿にも示したとおり、宇多皇后温子の女房（『古今和歌集目錄』に「更衣」伊勢御の生んだ皇子を「を」とこみや」「を」とこみこ」「を」とこきみ」と記している。また天皇自身の子ではないが、同じく本稿に示した宇津保物語国譲中の例でも嵯峨院小宮が生むことを期待される次期東宮たる現東宮男子を「をのこ」と言っているし、宇津保物語俊蔭では「（式部大輔左大弁清原の大君が）みこ腹にをのこ」（俊蔭）一人もたり」と、皇女腹で物語のヒーローを「をのこ」というかと思うと、忠こそ巻では「一世の源氏」腹の右大臣橘千蔭の子（忠こそ）を「を」とこ」といつたりする。ヲノコ・ヲトコの使い分けに母の身分が必ず関わっているとも言いがたいように思う。それよりも、俊蔭・仲忠・光源氏という明白なヒーローたちの誕生・登場時にヲノコ類が用いられていることの方に注意すべきで（源は「源氏」、その理由に彼らに対する作者の愛情・親近感の表明、彼らに対する読者の心理的接近の企てなどの可能性を考慮する必要があるだろう）。

（16）万葉集ではヲミナヘシに「佳人部為」「美人部師」などの表記をあて、享和本『新撰字鏡』では「嬢」に「女良反婦人美也美女也良女也肥太也乎美奈」と注してある。

（付記）本稿は、平成十年六月六日甲南大学において行われた関西平安文学会第二十一回例会における発表「ヲトコとランナの語義的定位——平安中期を核に——」に基づいている。その際、ご質問・ご教示くださった諸先生方に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。不十分な成果ながら本稿をなすうえで、拠り所とさせていただきます。